

外国人が見た 幕末・明治期の 学生たち

■「お雇い」外国人の 日本人学生に対する印象

幕末・明治初期には多くの欧米人が渡来し、さまざまな分野での日本の近代化形成に尽力した。富国強兵、殖産興業と近代的国家づくりが課題の明治新政府に於いて、教育の面でも高等専門教育の開始と整備が急務であった。このため、それらの先進国から臨時に招聘・雇用された「お雇い」教師・技師たちが、日本人学生に対する指導に当たった。幕末に設置された医学校や開成学校、東京大学の前身校（そして明治になって新設された専門教育機関は）こうしたお雇い外国人教師の活躍に負うところが多かった。お雇い外国人の来日理由には、日本への強い関心、開化の指導者たちらんとする使命感に加えて、高い給料が魅力という現実的な動機があった。しかし、その一人グリフィスがいうように、アメリカに留学していた当時の日本の若者、学生たちの燃えるような情熱、ひたむきな向学心と国家への使命感に燃えて学業に励む姿に心打たれたことにもあった。

■ カッテンディーケや ポンペの記録から

1855年（安政2）に長崎奉行所西役所に創設された長崎海軍伝習所の指導者でオランダの海軍士官W・カッテンディーケや日本初の西洋式病院、長崎の小島養生所を設立、本格的近代西洋医学教育を導入したJ・ポンペの記録を見てみよう。カッテンディーケは彼の著書「長崎海軍伝習所の日々」の中で、日本人の物分かりの早さ、熱心さを認め、ポンペも「ポンペ日本滞見聞記」で学生の理解力のよさ、教科を貪り摂取する熱意を記している。

しかし、カッテンディーケは、日本人学生には慎重に扱うべきことを茶化してしまつような、軽々しい態度が見られることを同時に記している。また、ポンペも、熱心さのあまり臨床治療や手術のやり方など、一足とびで性急に結論、解答を得ようとする日本人学生の安易な態度を戒め、彼らのそのような要求を一蹴したことを記している。そうした中でポンペは、医学の基礎となる教科課程を着実に学習する大切さとともに、何事も徹底的に学ぶ辛抱強さを教えたのだ。

■ ときには「博物館」へ

お雇い外国人やポンペなどが讃えた日本の学生たちの強い知的探究心は、いまどうだろうか。博物館来館者に限って見ると、学生の姿が極めて少なく、心もとない。コンピュータやインターネット、大型テレビ、携帯電話などで容易に「モノ」を見ることが出来る時代に、博物館に行くことにどんな意味があるのか、ということかもしれない。しかし、最近の博物館は来館者の知性を刺激し、未来を創りだすためのさまざまなデザイン、装置が用意されている。若いときは生きる目的や方法を探し迷つことも少なくないであろう。そんな時、博物館で「ホンモノ」の価値を感じたり、新しい世界に出会って思わぬヒントが得られるかもしれない。長崎歴史文化博物館にぜひ足を運んでみては、と思う。



長崎歴史文化博物館館長

大堀 哲 Ohori Satoshi

1937年福島県生まれ。1959年東北大学教育学部卒業後、文部省社会教育局、国立科学博物館教育部長、東京大学大学院教育学研究科助教授を併任。静岡大学情報学部教授、私立常磐大学の副学長、学長を経て、2005年7月長崎歴史文化博物館館長就任、現在に至る。日本科学協会評議員、日本ミュージアム・マネジメント学会会長。



ポンペ著「日本における五年間（1857～1863）」の口絵に描かれた小島養生所
長崎歴史文化博物館所蔵

